



ベストピア
Bestopia

第327号
2014年5月号
www.bestopia.jp

一日一度は大空を見上げよう

(1)晩晴塾に参加

標題の言葉は、ベートーヴェン第九の「合唱」を原文に忠実に邦訳され、その真髓を普及されている藤井義正さんの平成24年の年賀状からの引用です。

その藤井さんが晩晴塾を開かれました。兵庫県の神戸駅近くの神戸クリスタルタワーに5月14日参加してきました。

晩晴塾の目指すところは「人生本来晩晴を重んず」という言葉に由来し「人生は最後の最後が大事。その時、心晴れやかな心境でいられるなら、それが人生で一番大切なこと」と解釈し、その為に「今、ここ」どうあるべきかを共に学ぶことにあります。

藤井義正さんは兵庫県高齢者生きがい創造協会に長年勤められ、「兵庫県高齢者放送ラジオ講座」の番組の制作に従事、1992年には兵庫県高齢者放送大学長の要職をなされた後に退職、一年の年金生活の後、兵庫県阪神シニアカレッジの副学長に就任、2005年から完全な自由人になられています。

私は2年前にベートーヴェン第九の「合唱」の邦訳で苦勞していき詰まっておりました時、藤井さんの名著「私の第九・シラーの詩〈歡喜に寄す〉からベートーヴェンの歡喜の歌」に邂逅しました。早速に手紙を書き、明石のご自宅を訪問し指導賜っております。知識のレベルには格段の違いはありますが、仮説の設定、検証の仕方、感じ方がよく似ており、私は藤井さんをナッフフォルゲンしているように見えます。

4月に20日ほどヨーロッパを旅した折りに外国は若い人が多いなあと思い、戻り、怖くなるほど改めて驚いたことは、とにもかくにも高齢者の波、渋谷や新宿にも若い人に負けないくらいに「私」が歩いています。書店には高齢期と名の付く本が所

狭しと並んでいます。高齢者向きのクラブは大盛況で、私も妻も複数に所属して趣味を楽しんでいます。正直に言いますと「高齢期」とか『高齢者〇〇〇』にはへき壁としています。「今更、高齢期セミナー」なんて陳腐化していると思っていたのです。内容は概して、「生涯現役」「アンチエイジング」「いつまでも若々しく、生きがいを持って、社会に貢献しましょう」に類すること、即ち、「理想的な高齢者像」が優勢になって私の求めるものとは違っていました。理想的な高齢者像は「老いの厳しさ」からの逃避のように感じていました。

(2)晩晴塾の目的

そんな時に藤井さんからメッセージが届きました。

老いの道は険しい。沢山の試練が待ち伏せしている。晩晴塾は「老い行く人の心を内側から温める営み」を目指して「さまざまな障害と試練を乗り越えて、懐の深い山に分け入る。そして、老いの深まる高齢期を心豊かに、心晴れやかに生きる」その心の枕となるメッセージやアンソロジーを送り共に晩晴の人間学を学びたい。それは最近読んだ天声人語の一文に繋がりました。

「老境に入って、ふさわしい尊厳を保つことは人生で大切だ。終わり良ければ、すべて良し。終わりこそ常に王冠です」

私もそう思い70歳で完全な自由人になって最後を考え始めていました。

「晩晴の人間学」の三つの課題

- (1)定年後の人生危機にどう向かうか。高齢期の入り口の課題
- (2)坦々と過ぎゆく長い老いの日をどう充実させるか。高齢期全般の課題
- (3)最後にやってくる「いのちの実相」にどう向き合うか。後期高齢期の課題

お許し頂き私見を加えます。私のような者を含む個人事業者やオーナー経営者特有の定年の問題があります。ここでは「生涯現役」があり得ますので(1)と(2)の問題が省略可能です。働きながら(3)を考えている人もいます。

私の場合は65歳で自由業を辞め、サラリーマンを5年間勤務し70歳で自由人となりましたがその5年間は(1)の時期でした。物質的には恵まれていましたが精神的には四苦八苦の難事の時代で人生で一番苦しい経験をしたときです。

今は(2)を自由人として、生かされていますが、現役時代とは異なった社会への関わりが新たに加わり、より豊かに感謝に満ちて(3)に向かっています。

この(1)(2)(3)は心理学的には①承認—②受容—③断念—④信頼（おまかせ）になるようですが③は諦念と置き換えられて、「諦念の始まりは定年から」と言えます。

(3) 「人生の中の高齢期」

5月14日第2回目のテーマは「人生の中の高齢期」、2時間半があつという間に過ぎてしまいました。多くのアンソロジーを準備してくださいましたがメインはポール・トゥルニエの「人生の四季」からの学びです。

藤井さんは①から⑱までに纏めてくださいましたが、その一部を紹介します。

⑨そうです。こんなふうに秋は突然、近寄って来るものです。春にはどれほど美しく花が咲こうと、夏がどれほど美味しい果実に満ちていようとも、その果実の数には限りがあり、実のなる時期にも限りがあります。まだ葡萄園に金色に輝く美しいぶどうの房がたわわにゆれていても、その命数は定まっています。私たちは、青年期に経験した危機よりも、おそらくもっと苦汁に満ちた危機が今や避けられないことをはっきり感じます。

⑭まったくのところ、一つの季節から別の季節への過渡期というものは危険なものです。それはユングのいっている通り、それまでの人生の推進力であった人生の計画とか目標がいやおうなしに変わらなければならないのです。中略
人間は遅かれ早かれ、充実ということについて別の考え方を発見しなければならないのです。

⑮向老期にある人間が美しい秋を味わい、さらに発展していくためには、人生の半ば頃の人生観から自由になることが必須条件です。まさに老人になろうとする時に頼りにできるものは、このような個人としての成熟のほかありません。

⑰一前略一老年期とは、人間が行動の炎の中でなし得たよりも、もっとゆっくりと、暇をかけて自分の人生を反省し、何が価値あるものかという問いを解こうと試みる時期なのです。

⑮老年とは、価値の再検討の時期であり、つかの間の価値から永続的な価値への、困難ではありますが、前進的な移行期なのです。

⑥熱心で従順な学習が子供時代の法則であり、自律的な行動が成年期の法則であったように、人生の意味の探求が老年期の法則となるのです。

藤井さんのマトメを読み直して私が理解したことは、成熟した老年期のためには成年期の自律が前提にあるということ、そして老年期を第二の青春と言われ自律に向かつて試練に遇い悩むが夢と希望で難関を切り抜けたものが成熟へと向かう。それに必要なのは学びである。そこで藤井さんは生きる喜びを説く「老いの人間学」を広められています。認知症には優れて考察をもっておられ、生涯学習の方向性を指し示すことに使命感を感じられておられ、それを実践されていると私は考えます。

更に引用を続けます

⑩真の幸福は、常に一つの深い「内心の統一」と結び合わさっています。自分の年齢を肯定することこそ、真の幸福の前提なのです。つまり、私たちは成年に達したならばもはや子供ではないことを肯定しなければならないし、年をとって来たら職業の多くの活動を断念しなければなりません。これが定年の問題です。

⑪最も幸福なのは、人生とは年齢とともに変化してゆくべきであり、私たちが現にやっており又これからもやることができる様々な活動は、だんだん意味を失っていくのであって、これからは、主として内面生活のありかたが大事だということを理解し、容認している人々です。

私は「内心の統一」について考えていましたら、5月18日の夜、読んでいた本に次の文章を発見しました。

「真の充足感、まず自分の心が本当に欲している方向と、神の導きの方向が合致した時にだけ得られるのだ」

(ジェームズ・レッドフィールド著「第十の予言」p52)

この文にであって寒気のする戦慄が走りました。偶然の一致ではない偶然に。

この本は「聖なる予言」の続編ですがこれを紹介してくださったのも藤井さんです

(4)晩晴塾の今後のスケジュール

- 6月4日(水) 喜び上手になる。
- 7月9日(水) 高齢期の生きがいと人間関係
- 8月 心を燃やして生きる
- 9月 南無の風向
- 10月 命の温もりをいただいて
- 11月 晩晴の先達
- 12月 第九に学ぶ「老いの生き方」

原則は第二水曜日です。参加費は1000円です。

詳細は藤井義正さんへ直接お電話でお問い合わせくださいませ。

☎番号・FAX 078-936-7749

藤井さんの「老いの人間学」の骨子は「生きる喜び」です。著書を紹介します。

著書 ①「心豊かな高齢期のために」 ミネルヴァ書房
② 私の＜第九＞ 神戸新聞総合出版センター

①は晩晴塾の土台となっている藤井さんの定年退職時1996年の実感こもる、知識満載の本です

②は藤井さんが命がけで取り組んでおられる第九の合唱の邦訳の物語。

シラーの詩「歓喜に寄す」からベートーヴェンの「歓喜の歌」へ

「大いなるものに抱かれてある」藤井さんの真骨頂への導きがあります。

第九の好きな方には必読の書です。「苦悩をつきぬけ歓喜にいたる」ベートーヴェンの音楽を深く聴けます。

